慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	テリアカ考(一) : 文化交流史上から見た一薬品の伝播について
Sub Title	The Theriaka : a historical study of an Antidote
Author	前嶋, 信次(Maejima, Shinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1963
Jtitle	史学 Vol.36, No.4 (1963. 12) ,p.1(421)- 31(451)
JaLC DOI	
Abstract	In the Annals of T'ang dynasty, we see the mention about the envoy of Fu-lin Kuo, ordinarily identified with the Byzantine Empire, who came to Chang-an and presented "Ti-Yeh-Ch'ieh" to the then Emperor of China. The late Prof. F. Hirth thought-that the Ti-Yeh-Ch'ieh should be the theriaka (theriac, treacle) which is a very famous antidotal drug invented by a certain Greek physician in the 2nd century. We can find in various Chinese documents prior to the date of the above mentioned envoy of Fu-lin country the name of this medicament. For example, in "Shin-hsiu-pentsao" (New Materia Medica), compiled in 659 A. D., we read that this thing was a drug of the far western countries and foreign people brought it to China from time to time. In Japan, the oldest existent book which contains the record concerning the theriaka is "I-hsin-fang" written in 980 A. D. by Tamba-no-Yasuyori. On the other hand, it is not difficult to find out many articles relating to "tiryaq", theriaka, from among the Islamic literary works. Through these materials, we should be able to make clear in detail the prescription of this antidote and to know how it was and is still popular in the Middle East society. In Japan, the theriaka was introduced again since the 16th century by the Europeans. The writer thinks that the historical study of the diffusion of this kind of medicine is not only interesting from the standpoint of folklore, but it will be able to contribute to clarify the currents of cultures between the East and the west.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19631200-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

テリアカ考（一）

――文化交流史上から見た一薬品の伝播について――

前嶋信次

目次

序言
一、中国伝来の事情
二、古代日本人とテリアカ
三、中東地方での受けいれ
四、アラブ医家の伝えたその製法
註　一―四八

序言

旧唐書（巻一九八）払菻伝によると唐の高宗の乾封二年（西暦六六七）に払菻国が「遣使献底也伽」とある。唐会要（九九）払菻伝には「乾封元年、遣使獣底也伽」とあるが「獣」は「献」字の誤りであろう。乾封元年が正しいか、二年であつたのか、それともこの二年にまたがつて使節が長安に来ていたのか、その辺のところはここではあまり重視し

ないでおきたい。要はその献じた品物にある。またこの払菻国の正体が何であつたかという問題も東洋史学上の重要なもので、容易にこの場合の相手をどこそこと断定することは許されない。この問題について最も努力を払つたのは、西洋ではフリードリヒ・ヒルト博士、東洋では白鳥庫吉博士であろうかと思われる。払菻国の問題はいうまでもなく大秦国の問題と切りはなすことは困難で、払菻国は大秦の別名であると記した両唐書その他の記事があるが、対照たるローマ帝国が時代とともに変遷するから、大秦・払菻問題を明かにするにはローマ帝国史や広義におけるヘレニズムの歴史に精通する必要があつて、東洋史研究者にとつては苦手といつてもよいであろう。しかしまた一面からみると、ヘレニズムと東アジアとの関係を明かにするためには、中国史籍に散見する大秦や払菻関係の記事はまことに重要な資料としなければならぬと思われる。

白鳥博士が明治三十七年の史学雑誌（四、五、八、十、十一月各号）に「大秦及び払菻国に就いて」という長編の研究を発表されていらい、晩年に病床にありながら「払菻問題の新解釈」（下）を榎一雄氏に口授されるまで（これは遺稿として昭和十九年一月発行の東洋学報第二九巻三、四合併号「白鳥博士記念論文集」に収められてある）[一]、その研究は前後四十年間に近く、博引旁証、数十万言にわたつている。しかしまだこれをもつて大秦・払菻問題が悉く解決したというわけではない。榎一雄教授もその後、「唐代の払菻国に関する一問題――波斯国酋長阿羅憾丘銘の払菻国」[二]「ササン朝末期の王統に関する両唐書波斯伝の記載について」[三]等の論考中でこの問題に関する意見を示している。白鳥・榎説によれば払菻はいつも東ローマ帝国やその属領、ことにシリア、パレスチナ、小アジアなどを意味するのみではなく、場合によつては、クテシフォンやバグダードにあつたネストリウス派のキリスト教団の中心を意味し、その王というのも景教の総教主（パトリアーク）などを示す場合もあつたし、またペルセポリス（イスタフル）や中央アジアのフルムなどが払菻とよばれ

た場合もあつたというのである。本稿は特にこの払菻の比定問題を考えるわけではないが、底也伽というものを唐の朝廷に献じた払菻国人が、ビザンツ帝国人か、ネストリウス派キリスト教会人か、どちらであつたにせよ、ギリシァ文化系統の地域から来た人たちであつたことは疑いないとしてよいであろう。本稿はギリシァ文化の所産たるこの底也伽というものの東方伝来その他の資料を検討し、それを通じて東西文化交流史上にも一データを提供することを目的としている。

一、中国伝来の事情

底也伽とは一体何であるのか、この問題について西洋で最も早く、しかも適切な意見を発表したのはヒルト博士であると思われる。名著「中国とローマ領オリエント」の中で「フィリップス氏は China Review, Vol. VII, p. 414 の中でこの貢献物について『中国の某学者の説によれば、これは神龕すなわち神像を安置するシュラインまたは持ちはこびの出来る箱のことである』といい、また『他の中国人は、これは伽藍または僧伽藍、梵語のサンガラマ、つまりテンプルとかシュラインであろうという意見を示した』といつている。私にはフィリップス氏にこのような意見をのべた二人の先生たちはどちらも誤つているように思われる。」とし、「底也伽は中国ではあまりもてはやされなかつたようだが、西洋諸国では高く評価されていた薬品の一つである。このものが、唐代の薬物学書で、七世紀中ごろに発表された唐本草中にまず記載されたことは明かである。明の李時珍の本草綱目（巻五〇）にもこのものに関する短い記載がある。同書には「底野迦」と書き、西戎にいで、その地方の人のいう所によれば豬胆を用いてこれをつくり、その状は久壊丸薬に似て赤黒色である。宋代には広東でも知られていた。その味は苦寒（にがくて冷たく）、無毒である。効能は万能薬

のそれで、百病中悪その他を治めるとある。また自分（ヒルト）の所蔵する本草品彙精要は西暦一五〇六年に明朝の太医院の撰になる稿本であるが、その第二十三巻には、大綱は本草綱目のものと一致するテキストのほかに、水彩でえがいた挿絵がはいつている。これは明かにこの薬の見本が中国の皇帝に献上されている瞬間を現わしたものである。皇帝の姿は、実際のところ、よほど単純に見うけられ、帝座のかわりに石上にすわつている。その前に膝まづき、緑色の手巾をかけた両手で、一枚の皿を捧げもつている一人の異国人の姿がなかつたら、とても彼の尊貴な地位を察することはできないであろう。この皿の上には撞球の玉くらいの大きさの赤や黒の丸薬が盛つてある。この稿本のテキスト（及び一五二三年刊本の証類本草など）によると、西方の製造者たちは諸胆を練り合わせてつくるとしてある。本草綱目に猪胆（ぶたのきも）とあるのは諸胆（もろもろの動物の胆）とあつたのを気ままに改変したものと見える。何故ならば稿本の方にははつきりと「合和諸胆」としてあるからである。さらにこの稿本は「唐本注」を引用し「当時（唐時代）の胡人は甚だしくこれを珍重しているが、試みにこれを服用してみると効能がある。この薬は陶器にいれて貯うべく、その臭いは腥いが、これはおそらく中国につくまでに腐敗したためであろう」と記している。

自分（ヒルト）はこの薬品を古代や中世にもてはやされたテリアク theriac（ギリシア語の thiriaká）に比定することをためらわない。プリニウスによれば、この有名な万病薬は多数の薬品を調合して製したものである。六百種ともいわれるほどの多種類の原料でつくつたものなのである。同じプリニウスが、アンティオコス大王（Antiochus III, シリアを本拠としたセレウコス家の王、在位、西紀前二二三―一八六）が蛇毒を除く、他のあらゆる毒物に対する解毒剤として用いたテリアクの処方を伝えている。その中には胆が含まれていないことは事実だが、この薬は一定の重さの丸薬に製してあると述べている。この薬の調製法は時代がたつにつれて、何度も変化したものの如くであるが、その肝

腎な点は、いつの場合にも、これがまことに複雑、高価で、しかも世にもてはやされる薬であったことであるように見受けられる。プリニウスは、これをこけおどかしのいかさまものと考えていたらしいが、中国人がその薬物譜中でさして顕著な地位をあたえていないのは流石だと思われる。私はテリアクについての後世の処方をも見たことがあるが、その中には没薬、蛇胆、阿片などの如く本質的に苦味をあたえたにちがいない諸物質をいれてあった。おそらく阿片はしばしば多量に加えられたものかと思われる。大麻か阿片の効能を享受しようと思った中世のイスラム教徒は、これら薬品そのものを服用する代りに、この練薬の方を服用したのである。そして阿片がはじめて中国にもたらされたのは、こういうものに姿をかえてであったろうと推察してもよいかと思う。デルブローはその東洋全書（D'Herbelot, Bibliothèque Orientale）の中で、Benk（西アジアでナス科の薬用植物ヒヨスを意味し、また大麻の葉から調製する麻薬の名としても用いられている）という言葉の条下で次のように記している。『ベンクとアフィユーン（阿片）を常用する人々は、アラブ、ペルシア、トルコ諸族の間では、ベンギーおよびアフィユーニーとよばれ、放蕩者として通っている。何故かというとこの二種の薬物は精神の自由と理智の働きをうばい、酒と同じ作用を起すものであるから、コーランに格別に指摘されているわけではないけれども、きわめて厳格なムスリム学者たちによって禁断の品とされているからである。またテリアクの方は許されてはいるものの、その名はしばしばベンクや阿片の別名に用いられるものだから、テリアキー（テリアクの常用者という意味）という言葉もまた放蕩者の別名となっている。』アラブ史家によると、最良のテリアクはイラーク、すなわちバグダードでつくられたものであった。[四]」とのべている。

以上に概要を引用したヒルトの意見は大体において正鵠を得ているように思われる。ただし、このギリシアの万能薬テリアカ（底也伽）が中国にもたらされたのは、唐の高宗の乾封二年が最初ではなく、もっとかなり早くからではなか

つたかと思われる節がある。その一証となるのは、それよりも八年前の、同じ高宗の顕慶四年（西紀六五九）に蘇敬等が勅を奉じて撰したという新修本草（唐本草）の巻十五獣部に「底野迦味辛苦、平無毒、主百病中悪客杵（忤とするが正しいであろう）邪気心腹積聚。出西戎。云用諸胆作之。状似久壊丸薬、赤黒色。胡人時将至此。亦甚弥貴、試用有効。」とあることである。

唐本草は現存する薬物書中、世界最古のものの一つとされている。もとは五十三巻ないし五十五巻あつたといわれているが、現存しているのは、そのうちの十一巻（第三、四、五、十二―十五、十七―二十）で、これらはことごとくわが国だけに残つたもので、複製本も出ている。この外に敦煌から、第十巻の一部と思われるものが発見され、薬名三十を収めてあるが、これを加えると都合、十一巻半が伝わつていることとなる。(五)

また医方類聚（巻四）五蔵門には

「五蔵論云、神方千巻、薬名八百、中黄丸能差千痾、底野迦善除万病」とある。私は中黄丸は恐らく牛黄丸の誤りかと思う。内閣文庫に蔵せられる医方類聚二百六十六巻は嘉永五年四月朔江戸侍医尚薬兼医学教諭丹波元堅撰という序文がついた和刻本だが「倣朝鮮国活字原本縮刷」とことわつてある。この序文にも記されたごとく文禄の役に加藤清正がその原本一部をもち帰つたものといわれている。(六) どの時代に何人が編纂したものであるか明確ではないが、引用した文献は一百五十餘部に達し、その中には宋元時代以前の佚書も少なくない。ただし、明の永楽年間以後の文献は引用されていない。丹波元堅の説によれば朝鮮の許浚の東医宝鑑に「本国祖宗朝命文官医官撰集金安国慕斎集。（同書中）襄文乗公碑銘敍称校進医方類聚」とあるが、梁文襄公は名は誠之、正統六（一四四一）年の進士で、六主に歴仕し、成化十八（一四八二）年に没している。されば、編纂の年歳も約略知るべしというのである。

ここに引用された五蔵論は范適が指摘したごとく、隋書経籍志に「五蔵論五巻」として登載されている。(七) またル・コックやグリュンウェーデルが新彊省で得た古文献中に耆婆の五蔵論残巻があつて、黒田源次博士が一九三三年に影印に付した医書四種中にもおさめられているという。(八)

さらに医方類聚巻六五「眼門」中には竜樹菩薩眼論を引用しているが、その中にも底野迦についての記載がある。それは積年の青盲、眼帯閉塞、頭皮腫痒その他の脳や鼻、頬などにかけての病痛に効能のある麻頂膏というものの処方を示したところで、烏頭、竜脳、杏仁、菊花、大黄、猪脂そのほか種々のものに「底野迦」六分を加えよとし、さらにこれを説明して「西番のもの、状は馳胆の如し」といつている。ここに引用された竜樹菩薩眼論という書物もおそらく隋代ころに行われたものと思われる節がある。隋書経籍志には「竜樹菩薩薬方四巻」「竜樹菩薩和香法二巻」「竜樹菩薩養性方一巻」などがあげてある。その「眼論」は文献通考の医家類には記載されているが、隋書経籍志には見あたらぬ。故に隋唐時代にすでに行われていたのかどうかは確証はないけれども、竜樹の医書といわれるものが、隋唐のころ、種々行われていたらしいから、恐らくはその眼論というものも、その中にあつたのではないかと思われる。トーマス・ワッターズは大唐西域記の研究の中で次の如く述べている。

「ナーガルジュナ（竜樹）がその在生中も、また死後も末永く、その生国においても、また諸外国においても高名であつたのは、ただに仏教の大師としてだけではなかつた。彼はまたバラモン学徒としてのあらゆる学問に訓練されており、薬草の効能、星宿の祕密な影響力、錬金術、魔術師や祈禱師の祕術などをも心得ていたし、また医師としても有名で、内科医および眼科医として成功したその名声は中国にも達した。私たちは彼の「眼論」についての記載を見出すが、竜樹菩薩薬方四巻や和香法なども記録に残つている。また「ハルシャ・チャリタ」の中には、ナーガールジュナが

地獄の竜王から真珠でつづつたマンダールキニーをもらつたが、これはあらゆる毒物を解く特別の效力をもち、これでさわるとあらゆる生きものはその苦痛からまぬがれたとしるしてある。[九]」

廖温仁博士は竜樹が眼科医としても卓越していたということを疑い「竜樹が世人の伝へし如く眼科医に特殊の伎倆ありしとは思はれざるなり。況や白内障の手術等迄も為せしとの伝説に於てをや。元来彼は眼科に関係なけれども、其偉大と又印度医学の殊に眼科に於て最も秀でたるより竜樹に仮託せしかと思はるるなり」といつている。[一〇]

ここでは真に竜樹の著であるか否かはさして重要な問題ではなく、とに角、竜樹の眼論として中国でかなり古くから行われていた医書中にテリアカを用いたという個条があることに特に興味をひかれるのである。竜樹の眼論はかなり早くからわが国にも舶載されてきていたと見え、平安朝時代（円融天皇の天元五～九八〇～年に成つたという丹波康頼の医心方に引用された隋唐の医書目中にも「眼論」「竜樹方」などが見え、これより先宇多天皇の寛平年間（八八九―八九七）に藤原佐世が撰した日本国見在書目録の医方家の書中にも「竜樹菩薩眼経」が「五蔵論」「竜樹幷和香方」などとともにあげられている。[一一]

二、古代日本人とテリアカ

中国では宋代に入ると、徽宗の大観二年（一一〇八）に蜀の医人唐慎微が「証類本草」三十一巻を著わしている。これを朝廷に献上し、その名も大観本草と改められた。「経史証類大観本草」とよぶのが正式の名称らしい。著者唐慎微は風采すこぶるあがらずといわれたが、学問の方は該博で、よく諸家の本草および各薬の単方をつたえて千古に垂れ、淪没にいたらざらしめたのは、皆その功であつたと李時珍が本草綱目巻一中でほめている。富士川游博士は「医史漫録

の二」底野迦の項中で、この大観本草にも底野迦に関する記載があることを指摘している。(一二) 同じ徽宗の政和六年（一一一六）に世に出た政和本草（政和証類本草）は医官曹孝忠が朝廷の命をうけ、大観本草を校正して刊行したもの、四部叢刊本は三十巻で、両者の間には若干の異同はあるが、共通の部分の方が遙に多い。底野迦に関する限りでは唐本草を引用し、格別の新内容を含んでいない。

宋代の本草書中、このものに関して新しいデータを伝えているのは蘇頌の図経本草であると思う。この書は散佚してしまったようであるが、本草綱目（巻五十獣部）底野迦の項に「頌曰く」として、これを引用し「宋時南海亦或有之」と記している。蘇頌は字は子容、福建泉州府同安県の人で、哲宗のとき丞相にあげられた。図経本草はそれよりよほど前、仁宗の治世期（一〇三一―六三）の間に成ったもので二十一巻あったという。撰述のころ頌は太常博士であったという。おそらくまだ比較的少壮時代にあったのではないかと考えられるが、その出身地からみて、蕃舶のもたらす異邦の産物にも明るかったものであろう。

明末の李時珍（一五一八―一五九三）の本草綱目についてはここに蛇足を加えるまでもないが、名著本草綱目は一五五二年ころに著手し、一五七八（万暦六）年に大体の稿を終わり、一五九〇年に刊刻を開始したものといわれている。(一三) 李時珍がこの書の底野迦の項で引用しているのは唐本草と宋代の図経本草とのみであり、格別の新材料は加えていない。唐以後、中国でさして流行しなかった一証かも知れない。

わが国の医書中、底野迦のことを伝えたものは富士川博士の説によれば円融天皇の永観二年（九八四）に円波康頼が撰した「医心方」でその第一巻、諸薬和名の部に「底野迦唐」と記載し、これが唐土から舶載した薬品で、和名はないことを示しているが、これについて富士川博士は「少なくとも今から一千有餘年前、我邦が西洋との交通をなさざりし

時に「テリヤク」の名称が、我邦の医人の知るところとなりしことは疑を容れぬことである。」といわれた。[一四] 医心方が書かれたのは一代要記によれば円融天皇の天元五（九八〇）年で、永観二年十一月二十八日に、これを奏進したものであるという。これより古い「大同類聚方」（現存のものは後世人の偽作）や「金蘭方」は散佚に帰したので、現存する日本古医書中ではこの医心方三十巻が最古のもので、安政年間、幕府の命で上梓されたと廖温仁博士も述べている。[一五]

ただし、奈良朝や平安朝時代の日本へ実際にテリアカが舶載され珍重されたものかどうかは知るすべがない。正倉院には奈良朝時代に大陸から送られてきた薬品がかなり多数保存されているようであるが、テリアカがその中にあるかどうか疑問である。中国の医学がかなり早くからわが国に伝わって大きな影響をあたえたことは富士川博士の日本医学史をはじめとして先人の研究に詳しい。服部敏良博士の説によれば大宝令中の医疾令（逸文が群書類従に収めてある）によれば

医針生各分レ経受レ業。医生習二甲乙、脈経、本草一、兼習二小品、集駿等方一云々　とか

医針生先初入レ学者、先読二本草、脈決、明堂一。読二本草一者即令レ識二薬形薬性一云々、および

教二習本草、素問、黄帝針経、甲乙一、博士皆案レ文講説如下講二五経一之法上。

などとあって本草は当時の医学生の必修書であった。したがって彼等の業が成ると式部省は更にこれに試験を行い、甲乙経より四題、本草及び脈経より各三題を出したことは、

「医針生業成送レ官者式部覆試二各十二条一。医生試二甲乙四条、本草・脈経各三条一下略」とあるによって明かである。

医学を修めるものの中には薬学を専攻するものもあって、これを薬園生とよんだが、医疾令には、これらも「教二読本草一、弁二識諸薬幷採種之法一」とあって、本草書の読みを教えてもらう一方では、実習の時間もあったのである。[一六]

ここにいう「本草」とは令義解や政事要略には「新修本草」（唐本草）二十巻と註されていて、通常は唐初の新修本草のことと解されている。しかし服部博士はこれを疑い、梁の陶弘景（隠居）の「本草集註」（詳しくは神農本草経集註）のことではないかとも考えている。その根拠は、続日本紀（巻三九）桓武天皇延暦六年（西暦七八七）五月の条に

「戊戌、典薬寮言う、蘇敬註新修本草と陶隠居の集註本草とを相検するに、一百餘条を増す。亦今、草薬を採り用うるに、既に敬の説に合す。請う、これを行用せんと。これを許す」とあつて、新修本草がわが国の官学で公式に行われるようになつたのは平安朝時代に入つてからであるから、大宝令のころは、まだ陶弘景の書が用いられていたのかも知れぬというところにある。(一七) これについて同博士の結論を次に引用してみよう。

「医疾令にいう本草が、単純に新修本草の事とのみは断じられず、かの神農本草を梁の武帝の時、陶弘景が増補删正して七巻となした「本草経集註」七巻の事も一応想起さるべきであろうと思はれる。梁の武帝の時代は、（中略）大宝令の制定された時から約百餘年をさかのぼるのである。而して、また新修本草の編纂せられたのは、唐の高宗の顕慶四年で我が大宝元年より四十餘年前である。

由来、医疾令は既にも述べた如く唐朝の制をそのまま引用せる箇所が相当多く、ここに本草と称するものも唐朝に於て使用されていたものと解するのが妥当と考へられる。而して、唐の高宗の即位は我が推古天皇の二十六年に当るから、おそらく唐朝に使用せられた本草は新修本草ではないと考へられるのである。

殊に唐朝の医生必修課目に「甲乙経」を挙げて、隋代に編纂された「病源候論」及び唐初の「千金方」を省きたる点をも綜合し考察すれば、医疾令に謂う本草なるものは、続日本紀延暦六年五月の条に謂へる如く、恐らく陶弘景（隠居）が註せる本草経集註七巻を指すのではあるまいか。この事についてはつとに故中尾万三博士も指摘せられてゐる所であ

る。

しかしながら、奈良時代には他方また新修本草が我が国内に流布されていたことも明かであつて、現存するその残闕本の原本には、「天平三年歳次辛未七月十七日書生田辺史」の識語が著けられてある。従つて、大宝令に規定された本草と称するものが、陶弘景の集註本草であるとしても、当代一般には、やはり新修本草も使用されていたものと推測出来るのである。(一八)」

右文のうち「唐の高宗の即位は推古天皇の二十六年に当る」とあるのは誤りで、推古天皇の二十六年は隋が滅び、李淵（高祖）が、これにかわる唐朝を建設した年であり、高宗と高祖の混同であろう。高宗の即位はそれより三十二年目の孝徳天皇の大化五年のことである。新修本草が編纂されたのは、それより更に十一年後のことであるが、それから後は本草集註は徐々にすたれて新修本草が行われるようになつたことは、敦煌で発見された開元年間の本草集註の写本を羅振玉が影印に付した際、「本草の学は、唐本草行われて隠居の集註微なり云々」と書いた如くであつたろう。もちろん唐初には集註が行われたのであろうが、次第に唐本草にとつてかわられたのである。続日本紀延暦六年五月の条もある以上、わが大宝令医疾令の「本草」とあるのを陶弘景の本草集註と解するという考え方はもつともではあるが、それにしても唐本草が出来てから百三十年近くもたつた延暦六年になつて、はじめて公式にこれが医学教育に採用されたというのは、当時の日唐交通事情から見ても少しく緩慢にすぎるように思わる。いずれにせよ、奈良時代には新修本草がわが国内に流布されていたことは服部博士の説の如くであつたにちがいない。

延喜式（式部上）によれば「凡そ医生は皆蘇敬の新修本草を読む」とあり、またその典薬寮の部には「凡応レ読ニ医経一者、太素経限ニ四百六十日一、新修本草三百十日云々」「凡太素経准ニ大経一、新修本草准ニ中経一、小品・明堂・八十一

難経並准ニ小経一」などとあるのによつて新修本草を修めるに要した日数とか、その尊重された程度などがわかると思われる。

このような事情のもとに、唐土の医学の流行にともない奈良・平安時代のわが国の医人が底野迦（テリアカ）についての一通りの知識をもつていたということは当然考えられることである。

三、中東地方での受けいれ

ギリシァ人の発明したテリアカは右の如く少くも隋・唐時代から中国、朝鮮、日本その他の極東地域にも知られたのであるが、もつとギリシァ文化の影響を受けやすかつた中東地方では尚更にそうではなかつたかと思われるのである。はじめて私が底野迦のことについて興味を覚えたのは富士川游博士の令息である富士川英郎東大教授からこの霊薬の東方伝来のことについて教を受けて以来のことである。その後、まもなく私はシカゴ大学の東洋研究所にしばらく滞在する機会を得た。同所にはNear Eastern Library と Far Eastern Library との二つの充実した図書館があつて、文化交流史の研究などを行うにはまことに便利であつた。これまで底野迦についての研究を行つた富士川博士や中国の范適氏（字行準・明季西洋伝入之医学—中華医史学会編、医史叢書之一、一九四三年北京刊）などが示した資料中、中東地域に関するものは、イタリアの艾儒略（Julius Aleni, 1582—1649）の職方外紀中の左の一説である。

「如徳亜之西有レ国名ニ達馬斯谷一、……土人製ニ一薬一甚良。名ニ的里亜加一。能治ニ百病一。尤解ニ諸毒一。有ニ試レ之者一、先覓ニ一毒蛇一咬傷、毒発腫脹、乃以ニ薬少許一嚥レ之、無ニ弗レ愈者一。各国甚珍ニ異之一」（同書巻一、如徳亜の条）

如徳亜について、アレーニは註して「古名払菻、又の名は大秦」といい「亜細亜の西、地中海に近く名邦あり。如徳

亜という」ともいつている。如徳亜は Judaea を写したもの、達馬斯谷は Damasco（Damascus）であることは疑ない。それにしては如徳亜之西に達馬斯谷があるといつているのは方向において誤つている。的里亜加がテリアカであることもすでに幕末の蘭学者をはじめとして多くの先人が指摘したところであるが、恐らくそのラテン語名 theriaca を漢字で写したのであろう。いうまでもなく職方外紀六巻はアレーニが明の天啓三（一六二三）年に中国文で書きあげたものである。この種のものにはすでにアレーニと同国のマテオ・リッチが著わした万国輿図（または図誌）というもの、更にスペイン人パントーハ（龐廸我・De Pantoja）とイタリアのサバティーニ（熊三拔、Sabbathinus de Ursis）が万暦帝の命をうけてつくつた図説などがあつた。龐・熊二神父のものは、福建の港へ海舶がもたらした二幅の欧文地図を翻訳したものであつたと、李之藻の書いた職方外紀序にしるしてある。アレーニはこれらのものを基礎とし、更に「西来、たずさえしところの手輯の方域梗概を取りて増補をなし、もつて一編となす」と同書の自序にしるしている。彼がはじめて中国に来たのは一六一〇年であつたというから、(一九) このテリアカに関する資料なども、或はそのときに持つてきたものかも知れない。富士川博士はこの一文を引き「思ふに、テリアクは此頃既に民間薬として広く行はれ、艾儒略もその方を伝へたるものであらう。」という意見をつけ加えている。(二〇)

もともとアラブ人の医学はギリシァ医学に負う所が多く、薬学においても同様である。マイヤーホフは、アラビア語の薬学書は夥しい数にのぼつているが、薬学上の理論においては本質的の問題においてギリシァ人以上には進んでいない。アラブ族は薬の作用の三段階の理論においてはガレノスの説を忠実に踏襲し、ただその組織的方法をもつて、更に項目を細分し、また薬品の作用を説明する用語を増加した。アラブ族の真の貢献は薬物を二千餘種も新に増加したことで、砂糖、レモンその他の柑橘類、マンゴー、ジャスミン、胡椒などもアラブ族が西方世界にもたらしたものである

し、多種類の染料をつくり、またタンニンをも紹介した。樟脳、センナの葉、たまりんど、にくずく、大黄などの薬用も彼等によつて明かにされたと述べている。(二二)

またアラビア語の医書や薬物書にどの位までテリアカの記載があるかということも充分に知るのは困難である。というのはマイヤーホフの博識をもつてして、一九四四年になお次の如く記しているくらいだからである。

「アラブ医学史をすべての要求に応ずるように書くという仕事は誠に難問題であり、現在のところでは恐らくこれを解決することはできないであろう。すでに相当数の資料をあげたが、その外なお多数の稿本や史書をきわめて広汎綿密に研究する必要がある。思うても見られよ、イスタンブールおよびその周辺のみでも古写本をぎつしりとつめこんだ八十三のモスクの書庫があるが、その大部分はまだ目録も作製されてはいない。数十万巻のアラビア語やペルシァ語の稿本がこれからの調査を待つているのである。その中には医学に関するものも莫大な数にのぼるが、現在までのところでは、ごく小部分のみが研究され、アラブ医学史のために利用されたにすぎない。……その上にまたパリのビブリオテック・ナショナール、マドリーに近いエスコーリアルの諸文庫、ブリティシュ・ミュジアム、ベルリン、ゴータ、ヴァティカンなどの諸図書館、オクスフォードのボドレイアン図書館や、シリア、エジプト、北インドなどの諸図書館もまたアラブの医人たちの書いた多数の稿本をその貴重なコレクション中に所蔵している。(中略)

最後にイスラム諸国のフォークロアも徹底的に研究されなくてはならぬであろう。何故ならば、古代や中世の数多くの医療の風習や手法が純粋な状態のまま、アラブ族のみでなく、イラン人、トルコ人、北インドの諸族、北アフリカのベルベル族、さらにスーダーンのネグロ族の間にさえも存続しているからである。現代の医療法と稿本中に詳細に記されたものとを比較してみると、しばしば驚くべき事実を発見することができる。このことは特に薬物学の方面で実証さ

れるのであるが、モロッコからデリーまで、タシュケントからザンジバルに至る地域内の薬市場において、古代のままの姿で、現在も活用されている薬品をみかけることがよくあるのである。[二二]」

右のような状態とすれば、古代ギリシァのテリアカが最も純粋な形で今に保存されているのは或はイスラム世界かも知れない。しかし、イスラム世界にこの薬がどのようにしてとりいれられ、またいかにして普及し、現在どの程度に使用されているかを詳細に示すほどのデータを集めることは至難の業でもあることがわかる。ここにはたまたま筆者が集め得た資料に基き、その範囲内で不充分ながら考察を試みるつもりである。

四、アラブ医家の伝えたその製法

私がシカゴ大学東洋研究所の近東ライブラリーの図書を探索しているうちに、ふと見出したのは「ナジュムッ・ディーン・マハムード」というアラブ系の医学者の「医療書」というものであつた。一九〇三年にベィルートのフランス系医科大学の医学及び薬学教授であり、ボルドー薬学会ならびに巴里薬学会会員たるギーグ博士 P. Guigues がアラブ薬学についての序論をそえ、アラビア語原文とフランス語訳文ならびに語釈とをあわせて、ベィルートから私家版として印刷に付したものである。[二三]

ギーグの序文によると原著者がどのような人であるかは殆ど知られておらず、ルクレールの今は古典的の名著となつた「アラブ医学史」[二四]にもあげてなく、ウュステンフェルトもその「アラブ医家名薄」[二五]の中に載せていないとある。しかし、原書のアラビア文タイトルを見ると Kiāb al-ḥāwī fī ʿilm al-tadāwī li-Najm al-dīn Maḥmūd b. Diyāʾ al-dīn Ilyās al-Shīrazī alladhī ishatahara fī al-jilī al-sābʿ li'l-hijrat とあつて、著者ナジュムッ・ディーンは回暦七世

紀（西紀一二〇四―一三〇一）、すなわち西紀十三世紀中のひとであり、その出身地はイランのシーラーズであつたごとく思われる。

この書の紹介者たるギーグ博士は、その序文中で、アラブ医学における薬品の分類法について説き「メスュエはそのグラバディンの中で薬品を次の十二類にわかつている」といい、

一、練薬（甘いものと苦いものと）　七、煎薬
二、阿片剤 Opiats　八、錠剤
三、下剤　九、丸薬
四、糖剤　十、粉薬（suffuf, safūf）
五、乳剤　十一、芳香薬と膏薬
六、シロップとロク rok　十二、油類

を列挙している。メスュエ Mésué とは九世紀前半の医学の大家で、その名前からしてイラン系と思われるイブン・マーサワイヒ（イラン風に呼べばマースーヤ Māsūya、ラテン名は Mesuë）のことでグンデーシャーブールの一薬剤士の子として生れ、バグダードでガブリエル・ビン・ブフティーシュウ Gabriel b. Bukhtīshū' について学んだ。グンデーシャーブール（またはジュンダイ・サーブール）はギリシァ系医学の大中心だつたところで、ブフティーシュウ一家もそこの名門で、ガブリエルはカリフ、ハールーン、アル・ラシードの侍医として令名があつた。マーサワイヒもこの師の推薦で、バグダードの某病院の長となり、やがて宮廷の侍医となつて、カリフ、アル・マームーン、アル・ワーシク、アル・ムタワッキルなどに仕え、八五七年にサーマッラーで没した。ギリシァ語医書を多数アラビア語に訳

し、また自身の著書も少くなかつたといわれている。[二六] ただし、ここに彼の著としてグラバディン Grabadin（正しくは Qarābādhīn）をあげているのは誤解で、イブン・マーサワイヒにそのような著述があつたという記録はない。Kitāb al-Aqrābādhīn という薬物書を書いたのはアン・ナディームの「書目誌」によればサーブール・ビン・サハル Sābūr b. Saḥl という学者で、グンデーシャーブールの病院長をつとめ、八六九年十二月二日に没している。[二七] マイヤーホフによると、その著は「大薬物書」aqrābādhīn kabīr ともよばれ、その時代における第一級の専門書であり、著者サーブールはクリスチャンで、グンデーシャーブールの病院長から、西暦八五〇年ころバグダードに招かれ、カリフ、アル・ムタワッキルの侍医となり、そこで世を終つたという。またその書は十七章にわかたれ、三世紀の長きにわたつてバグダードやペルシァの病院や薬店で薬物手引書として用いられたが、十一世紀になると同じくクリスチャンのイブン・ジャズラ（一〇九九死）の Minhāj al-bajān が書かれた。これは現在でも中近東地方の薬店の間に普及しており、薬品名をアルファベット順に配列した手引書である。さらに十二世紀になると、これもクリスチャンのイブン・アル・ティルミード（一一六四年死）が、これまで諸病院で使用されてきたサーブールの書にとつてかわることとなつた薬物書を著わした。この方は数種の稿本が残つているが、サーブールの書の方はアラビア語写本一部がミュンヘンに伝わつていることが知られているのみであるという。[二八]

ギーグが引用しているのは、このサーブールの有名な著書の方ではないかと疑われる。しかしマーサワイヒにしても、サーブールにしても、双方とも九世紀中ごろの人で、その時代の医薬の分類法を示したものという観点からいえば、どちらであつても差支えはないであろう。

さらにギーグによると、十六世紀前半ころ、イブン・マーサワイヒ（実はサーブール？）の書に註釈を加えたジャッ

ク・シルヴィウス Jacques Sylvius（1478—1555）は、アラブ医学では薬物を左の十二類にわけていると記しているそうである。

一、練薬または解毒剤
二、糖剤 murabbā
三、乳剤
四、シロップ
五、煎薬 nuqūʿ
六、錠剤 qurṣ
七、丸薬
八、粉薬
九、軟膏（芳香剤）
十、油類
十一、蠟膏
十二、膏薬

更にギーグによればセラピオンの医書は三十七章にわかれ、薬剤についての一般論及びそれぞれの薬品の調製法を説いてあるが、その分類は左の如くであるという。

一、テリアクと練薬 maʿjūn
二、ヒエラ hiera（練薬の一種）
三、下剤
四、丸薬
五、錠剤（クルス）
六、粉薬（suffuf, safūf）
七、練薬（alguarisset）
八、乳剤
九、煎薬
十、シロップ（rob, julep, scanjabin）
十一、うがい薬
十二、油
十三、灌腸剤
十四、巴布（cataplasmes）

十五、軟　膏　　二十、歯磨粉
十六、膏薬以外の局所薬　　二十一、鎮静剤 sief
十七、膏　薬　　二十二、糖　剤
十八、火　薬　　二十三、吐　剤
十九、くしゃみ薬（くしゃみを起す薬）

セラピオンも九世紀ころの人で、メソポタミアの北部、エウフラテス川の上流にあたるアッ・ジャジーラ地方の町バージャルマーの医家に生れ、シリア語で著述したという。この人もクリスチャンだつたらしいが、その名を Yuḥannā b. Serapion（Yaḥyā b. Sarābiyūn）といい、その薬物書はアラビア語に訳され、また後に Gerardo de Cremona によつてイタリア語にも翻訳された。医学史家中にはセラピオンには二人あると主張するものもあるが、マイヤーホフはこれを否定している。ラーゼス（八六五―九二五）はしばしばセラピオンの書を引用している。セラピオンによつて新に紹介された薬物も少なくないが、ただこの人は薬そのものについての説明は行わず、もつぱらその効能を説いているといつている。(二九) この人の分類中にテリアカがまず第一類としてあげてあることは興味深い。練薬（éléctuaire, confection）というのは軟かいねり薬で、きわめて細かい粉薬をシロップまたは蜜、あるいは液状の樹脂でねりあげたものである。テリアカやトリフエラ、ヒエラなどはみなこうして製せられたものであり、アラビア語では ma'jūn と総称するが、原型 'ajana は「粉をこねる」の義である。もう一つ jawārish という言葉もある。ブトルス・ブスターニーの説では、マアジューンには甘いもの、苦いもの、芳香あるもの、悪臭あるものなどをすべて含み、ジャワーリシュの方は甘く、芳香あるものに限られ、もとはペルシャ語の Kawārish（消化薬）から出たものであるというのであり、

マーサワイヒの説によればマアジューンは永く保存する目的で製するとき以外は砂糖を入れないのに対し、ジャワーリシュの方はいつも砂糖を含んでおり、またマアジューンは熱を加えるとジャワーリシュよりも更に固くなる性質があるというのである。(三〇) これら各種の練薬中、長い間、最も高貴薬と考えられてきたのがテリアカで、毒蛇の肉、りんどう、肉桂、鹿子草、阿片、没薬、蕪の実、サフランその他、無数というべき薬品を練りあわせたものである。よく読まれている陳邦賢の中国医学史などには払菻国が唐朝に献じた底也伽のことにつき、「当時底也伽の中国に輸入さるることきわめて盛なり。これは欧州中世に有名なる一種の万病感応剤にして、此の薬には阿片の調合あり……」と記してある。(三一) なるほど阿片も用いられたらしいが、そんなに単純なものではなく、それよりももつと重要視されていた多くの諸薬を調合したものであつたことは後文に詳述したいと思つている。

まずイスラム諸国においては、どのようにしてこれを調製していたかを知るために、ナジュムッ・ディン・マハムードの書の第三十八章「テリアカ（ティルヤーク）について」の大要を紹介することにしたい。

一、ファールーク、または大テリアカ。

きわめて尊重され、効能著大であることを知れ。何故ならば、これは至高なるアッラーの御許しにて、命とりの諸動物に咬まれたり刺されたりすることによつて起る死より救うからである。最初にこのものの処方を発見したのはマグノスであり、これを完成したのはアンドロマクスで、これに毒蛇の肉を加えたのも後者である。このため、テリアカは完成し、有毒な生物の毒を解くというこれが調製されるに至つたそもそもの目的を果すことが出来るようになつたのである。実際、毒蛇の肉は毒液と同等の性質であるからして、相似の理由をもつて中毒の個所へとしみ通り、毒を解く薬効を生じ、患部を乾かし中和させるのである。（はじめて）このものの効能を明かにしたものはガレノスである。古代の

賢人たちがこれを調製した目的は蟲にさされたことからくる害から身を守り、刺されたり嚙まれたりした人々の健康を回復させるがために外ならぬ。それはこの中に五体を丈夫にし、皮膚の穴、管、毛孔を通じて毒を排除する諸薬を含んでいるからである。テリアカはまた多数の薬物、薬草をいれてあるので他のもろもろの病気にも効能がある。またこれら薬草の調合加減はその性能の強さや効能に応じたものである。古代人の証言によればテリアカはあらゆる毒薬を服した場合に対して有効である。また心臓、脳、肝臓を強くし、腸の潰瘍をいやし、下痢、咯血、痔血などをとめる。消化不良に効能あり、つかえを直し、慢性の咳、息づまり、胸部、腰部、肺の痛み、胃や腸の鼓脹、腹痛、疝痛などを治める。利尿・通経の効があり、水腫に著効がある。腸閉塞を解き、寄生虫を除去し、頭部皮疹をいやす。頭痛、てんかん、偏頭痛、難聴、視力減退、味覚の弱り、嗅粘膜のおかされたところから起つたり、黒胆汁の冷えからするあらゆる病気、および癩病、苔癬、象皮病、水腫、てんかん、中風症、顔面痲痺、卒中などのような難治の諸病を医やしたという。ただし、黄胆汁や血液によつて起つた高熱についてはテリアカでは治療することが出来ないとある。

ガレノスはこのものの効能を列挙して次の如くいつている。これは温にして乾、刺されたり咬まれたりした場合や、諸毒および癩病、苔癬、関節の痛み、およびすべて黒胆汁から起る諸病に対して有効である。

「準備」海葱のクルス（錠剤）四十八ミスカール、毒蛇のクルス、アンドルーフールーンのクルス、それぞれ二十四ミスカール。

「海葱のクルスの製法」水分を去つた海葱をとり、酵母をいれたパンの練粉をぬり、天火で焼く。内部の軟かい部分をとつて、充分に搗き砕き、これと同じ目方のいたちささげの粉を加え、葡萄酒でこねあわせる。薔薇油を手に塗つてから錠剤をつくり、二カ月後に使用する。

「アンドルーフールーン（イードゥフルーウーン）錠剤の製法」ダール・シーシャアーン Dār shishaʿān（仏名アスパラト aspalathe、アラブ名としては別に al-gandūl ともいい、北アフリカのベルベル族は arūzī と呼ぶ。とげのある丈の低い植物で、ギリシァ諸地、ロードス島、北アフリカその他に生じ、その根は香料製造に利用されるが、花も鮮黄色で芳香があるので、油の香つけに利用されるという。[三二]）マスティック（乳香）、肉桂皮、カサブル・ダリーラ qasab al-dhalīlah（calamus aromaticus 芳香のある芦の一種で、インドに産し、最良のものはルビー色で、節が密接しているとイブン・バイタールは云つている。[三三]）ナジュムッ・ディーンのテキストには qasab al-zarīra とあるが、誤りであろう。）鹿子草（かのこそう）、アサールーン asarum（一名野甘松）バルサム樹などを各六ミスカール、イドヒル idhkhir（schoenanthe、芦の一種）の粉とサフランをそれぞれ十二ミスカール、肉桂 dār ṣīnī、ハマーマー ḥamāmā（amomum、一種の香草）をそれぞれ二十四ミスカール、カミツレ二十ミスカールをとり、搗きくだき、絹ぶるいにかけ、乾葡萄の煮つめ汁で練りあわせ、一個一ミスカールの錠剤とする。製するときは手をバルサム油につける。

「毒蛇の錠剤の製法」若い雌の毒蛇をとる。雄蛇は牙二本であるが、雌は四牙をもつ故に区別しうるし、また雌は赤褐色をしている。若いものは活気があり、首をもちあげ、目は赤色をおび、頭は大きく、腹は固い。毒蛇を捕えるのは春をえらぶべく、頭の下、尾の上の所をほぼ指四本の長さに切りとる。捕えた後に生かしたままでおいてはならぬ。もしそうすると、毒が全身にひろがり、もはや利用することが出来なくなるからである。ついで皮をはぎ、腹をさいて臓腑をとり去り、清浄な淡水でよく洗いきよめ、これを何度もくりかえす。乾かしたのち、錫めつきした銅か土のつぼに入れ、それがかくれるまで淡水をそそぎこむ。いのんどの木（ʿīdān al-shibt）塩などを加え、肉が骨とはなれて汁のうちに落ちるまで煮る。そこで火をひき、さわることが出来るまで冷えるのを待つ。煮汁をこして別にとつておく。骨

を肉からはなして棄て、石の乳鉢で肉を細かくすりつぶし、その重さの四分の一量だけの、酵母をいれてよく焼いた白パンを加え、念入りにつぶし、別にとつておいた煮汁でこねる。こうして出来た練りものを一ミスカールの重さの錠剤につくる。終つたならば手にバルサム香油を塗る。錠剤を一日一回のわりでうらがえしして、湿気を帯びないようにする。すつかり乾いたならばガラスの瓶に密閉する。こうして出来たテリアカの錠剤の作用は、発汗によつて、体内の餘物を排去することにある。それで餘物を多量にもつた人がこの錠剤を服用すると身体に多くの吹出ものを生ずるのである。

右に述べたような処方で錠剤を準備したならば、次には黒胡椒と阿片を各二十四ミスカール。野蕪の種子、薔薇、いちはつ（イリス）、野びる、はらたけ、甘草の煎汁、バルサム油を各十二ミスカール。没薬、サフラン、しようが、大黄、オランダぜり、五葉の蛇苺、山の薄荷、マルビウム[三四]、イストゥーフードゥース（ストイハース）[三五]、クスト（Costus）[三六]、白胡椒、ダール・フルフル・クンドル・ダカル dār fulful kundur dhakar（ダール・フルフルは長胡椒、クンドルは薫陸香のことであるが、ここでは恐らく長胡椒のことかと思われる）、白鮮、イドヒル（シュナント）の花、テレビン・ゴム、黒肉桂、インド産甘松 ṣunbul al-ṭaiyib、かやつり草、以上をそれぞれ六ミスカールづつ。次に安息香、セロリーの種、いぶきぼうふう、なずなの種 ḥurf bābalī、にがくさ、アニスの実（ペルシァ語 nān khwah）、カマーダリウース Kamādariūs（Chamaedrys、もとはギリシァ語から出て「地の柏」の義、崖地に生ずる高さ二十センチほどの植物で、葉は柏に似るという[三七]）カマーフィトゥース Kamāfiṭūs（Chamaepitys、もとはギリシァ語で「地の松」の義、地にはう一年草で、その臭いが松に似るという[三八]）、リフヤッ・ティース lihyat al-tīs の汁（アラビア人が馬の尾ともよぶほふく性の植物、葉はねぎに似て、もつと短かく、ひろがつている。葉は食用となり、汁は薬用となる。

ギリシァ人は kistos とよぶという[三九] ケルト甘松 nārdīn iqrīṭī、にがよもぎ、インド産マラバスルム malabathrum（アラブ名 sādij）メウム（せり科の薬草）、りんどう、茴香（ういきょう）の種、印章土（ギリシァのレムノスの土で、アルテミス神殿につかえる女性がおした印章のあとがあるもの。深い洞窟から採取した土に山羊の血をまぜ、山羊の形を刻した印をおす。解毒剤として特効があると信ぜられ、また止血剤にも用いられた[四〇]）焼明礬、ハマーマー（ḥamāmā）、ワッジュ（Acorus calamus）、バルサムの実、鹿子（かのこ）草、アラビア・ゴム、カルダマーナ（たねつけばな、イブン・バイタールはスペインのグラナダ附近の山中に多く、山のカルヴィ〜ひめういきよう〜karūyā jabalīya ともよばれ、実の大粒のものは溪流のほとりに、小粒のものは岩がちの山中に生ずるといつている。名前の近似からカルダモン、すなわちしようが科の植物と混同される場合が少くなくないという[四一]）、アニス、アカシア（aqāqiyā）などをそれぞれ四ドラクマづつ、次に人参の実、ガルバヌム（楓子香）、カントリユーン・ダキーク qantriyūn daqīq（イブン・バイタールには大カントリユーンと小カントリユーン qantriyūn kabir, qantriyūn saghīr とをあげているが、ダキークはうすい、小さいなどの意味であるから恐らく、小カントリユーンのことであろう。湿地に生じ、葉は薄荷に似て、その実は小麦に似ている。どの部分も甚だ苦い。煎汁は諸病に特効があるとされている[四二]）うまのすずくさ zarāwand（出産の時に用い、また解毒の作用がある。チュニス地方ではルスタムの木 shajarat Rustam ともよぶ。その葉が丸味をおびたものと長目のものとある[四三]）等をそれぞれ二ミスカール。たちじやこう草の花による蜂蜜の泡だつたものを十ラトル。葡萄のロープ（煮つめた果汁）の甘くかつ芳香あるものを三ラトル半、以上をととのえ、固形物はよく搗き砕き、ゴムや汁液は葡萄のロープにひたして解けるのを待つ。次に蜜を加えてかきまぜ、一昼夜放置する。前もつて搗いておいた他の諸薬にバルサム油を混じ、葡萄のロープをまぜた蜜でこね合せる。銀、鉛または陶器の器に密閉するのだが、

一杯になるまで満たさぬように注意し、毎日、一分間だけ蓋をあけておく。この薬は満一年後にはじめて使用する。六カ月後に使用してもよいとするものもあれば、ある医師たちは五年たってはじめて用いた方がよいとし、またあるものは十年または十二年後に用いるがよいと云つている。

二、四色のテリアカ Tiryāq al-arb'a

毒のある諸動物の毒、胃の膨脹、肝臓や、脾臓の痛み、てんかん、顔面痳痺やけいれんなどに効く。「処方」、ギリシァりんどう（ハマーマー）、月桂樹の実、長葉のザルーワンド（うまのすずくさ）、半透明の没薬以上四種をそれぞれ同分量づつとり、搗き、絹ぶるいにかけ、三倍量の泡だつた蜜でこねあわす。服用量は一ミスカールづつ。

三、アザラのテリアカ Tiryāq al-'azarah

有毒動物の毒、腸の膨脹、肝臓、脾臓の痛み、てんかん、けいれん、顔面痳痺、中風症などに対して有効。「処方」りんどう、半透明の没薬、インド甘松、インド産マラバスルム、ラック lak（うるし?）マーミーサー māmithā（Glaucium、つのけし?）丁子、肉桂 dār ṣīnī、キームーリヤー（粘土）（スペインのトレドの粘土ともいう。ディオスコリデスによれば白色のと緋色のと二種あるという。イブン・ハッサーンの説ではバスラの人々はこれをアル・フッルともよび、アルメニア、北アフリカのシジルマッサ、スペインなどから来るとある。シジルマッサのものは純白、スペインのものは白か黒であるが、白いものが効能顕著である。食用にあてたり、蜂にさされたときの痛みどめその他に使う。[四四]）クスト（costus）、にがくさ、ギリシァりんどうをそれぞれ十二ミスカールづつ、イドフル（schoenanthe）の花、シストの汁、青デリアム（muql azraq、アラビアその他で産するゴムの一種）をそれぞれ八ミスカールづつ、除虫菊（'ākirqarhā、ヒレトリウム）茴香（ういきょう）の種、硫黄、いのんどの種、アサールーン（asarum、一名野甘松）カルダ

マーナ、燈台草 farbiyūn、阿片、ケルト甘松、葡萄の花、空豆の花、山セロリの実、人参の実、クレタのエピティム Aftīmūn aqrīṭī（特性はたちじやこうそう thym に似る。花を薬用とするが、クレタ産の紅色のものが最良で芳香がある。黒胆汁を排除し、気欝症を治すという）[四五]。ギリシアの良質の甘松をそれぞれ三ミスカールづつ。トラガント・ゴム、白けし、黒胡椒を各三十ミスカール。ひよすの実二十八ミスカール、肉桂、萼をとり去つた赤薔薇、アンドルーフールーン錠剤 aqrās al-andrūkhūrūn をそれぞれ九ミスカール、芸香（ウンコウ）の種一ミスカール、シトロンの種の皮を去つたもの、種を去つたダマスクスのスマーク（うるし科）各二ミスカール。バルサム油を二十四ミスカール。没薬の花四ミスカール半、にがよもぎ二十ミスカール、シトロンの葉十三ミスカール、以上をととのえる。これらの薬品中、搗くべきものはつき、ゴムや汁液は葡萄のロープ（果汁を煮つめたもの）にひたし、三倍の重さの泡だつた蜜でこねたのち、シナの陶器にいれて密閉し、六カ月後に使用する。服用量は必要に応じて一ミスカールづつである。

四、最も役に立つテリアカ at-Tiryāq al-anfa'

「処方」白胡椒、フィランジミシュク firanjmishk（においあらせいとうの類であろう。ビランジミシュクとも呼ぶ。栽培種のものと野生のものとの二種があり、前者をインドのフィランジミシュク、後者をシナのフィランジミシュクと呼ぶ。ギリシァ名はアキノスというが、芳香があり、消化不良を治し、歯や歯ぐきを強くするという。フィランジ・ミシュクとはペルシァ語でフランクの、つまり西欧の麝香の義である。）[四六] ブリオニア（白い葡萄という意味の別名があり、形状は葡萄に似る）それぞれ十ドラクマ。没薬、阿片、月桂樹の実、それぞれ七ドラクマ。ギリシア・ゲンチアナ（りんどうの属）、長葉のザラーワンド（うまのすずくさ属）、サフラン、がじゆつ jidwār（Amomum Zédoaire、解毒の力をもち、毒蛇やぶし（ビーシュ）の毒を解くとされている）[四七]。海葱をそれぞれ四ドラクマ。ギリシァ甘松 sunbul

rūmī、ヒレトリウム ʿāqirqirhā、マルビウムをそれぞれ二ドラクマ、海狸香一ドラクマをそろえ、搗き、こし、バルサム油とまぜ合わせ、三倍の重さの泡立つ蜜でこねる。六カ月間、大麦の中に埋めておく。服用量は一ダーニクである。

（ギーグ氏によるとアラブ地域の計量法は地方によってことなり、名称は同じでも実際の重量などにはかなりの差があるという。たとえば、一ミスカール mithqāl もレバノンでは四・一一九七グラム、シリアでは四・八〇グラム、（Wehrの辞典によるとエジプトでは四・六八グラム）一ラトル ratl はレバノンでは三九七・二六〇グラム、シリアでは二五六四・〇〇グラム、エジプトでは四四五・〇〇グラム（Wehr によるとシリアでは三二〇二グラム、アレッポとベイルートでは二五六六グラムであるとしている）であるという。また一ダーニク dāniq はレバノンで〇・五一四九グラムにあたり、一ディルハム（ドラクマ）dirham, drachma はレバノンでは三・〇八九八グラム、シリアでは三・二〇グラム、エジプトでは三・〇九グラムであるといっている。[四八]）

註

一　白鳥庫吉、西域史研究、下巻、（昭和十九年四月五日、岩波書店刊）にも収めてある。

二　北亜細亜学報第二輯、（昭和十八年十二月刊）

三　同　第一輯（昭和十七年刊）

四　F. Hirth, China and the Roman Orient, Leipzich & München 1885, pp. 276—79.

五　竜伯堅「現存本草書録」（一九五七年、長春刊）十七—十九頁。一九五九年上海版「新修本草」本文および跋文。

六　藤井尚久「医学文化年表」（昭和十七年、東京）によれば慶長三年（一五九八）に朝鮮から将来されたとある。

七　范適（行準）「明季西洋伝入之医学」民国三十二年（一九四三）中華医史学会刊、医史叢書之一、巻五、的里亜加の項（シカゴ大学遠東ライブラリー蔵書による）

八　万斯年「唐代文献叢考」民国三十七年（一九四八）開明書局刊・頁一〇一。

九　Thomas Watters, On Yuan Chwang's travels in India, Vol. 2., 1905, London, p. 206.

一〇　廖温仁「支那中世医学史」昭和七年京都刊、頁九四。

一一　富士川游「日本医学史」（昭和十六年、東京）頁五六、六二―六三。

一二　富士川游「医史漫録の二」（底野迦の項）中外医事新報第一一五八号所載（昭和五年四月号）頁二〇五、（富士川英郎東大教授より著者に貸与されたもの）

一三　張慧剣「李時珍」一九五四年上海刊、頁三六、四六。

一四　医史漫録(二)頁二〇五。

一五　支那中世医学史、頁七四―七五。

一六　服部敏良「奈良時代医学の研究」（昭和二十年、東京堂）頁七五―九八。

一七　同右、頁一五九。

一八　同右、頁一五九―一六〇。

一九　艾儒略伝（パリ、ビブリオテック・ナショナール稿本部所蔵）。明季西洋伝入之医学巻一にも登載されている。アレーニは万暦三八（西紀一六一〇）年にマカオに到著、同四一（西紀一六一三）年中国内地に入るとある。

二〇　医史漫録(二)頁二〇六。

二一　M. Meyerhof, Arabian pharmacology in North Africa, Sicily, and the Iberian Peninsula. (Ciba Symposia, August-September 1944, p. 1872.)

二二　M. Meyerhof, The sources of the history of Arabian Medicine. (Ciba Symposia, Aug-Sept., 1944, p. 1875)

二三　Le livre de l'art du traitement de Najm ad-Dyn Mahmoud, Remèdes composés, texte, traduction, glossaires, précédés d'un essai sur la pharmacie arabe par le Docteur P. Guigues, Beyrouth, chez l'auteur 1903.

二四　L. Leclerc, Histoire de la médecine arabe, 2 vols., Paris 1876.

二五　F. Wüstenfeld, Geschichte der arabischen Ärzte und Naturforscher, Göttingen 1840 のことかと思われる。ギ

ーグは単に Liste des médecins arabes と記しているのみである。

二六 C. Brockelmann, Geschichte der Arabischen Litteratur, Weimar 1898, Vol. I, p. 232.

二七 Ibn al-Nadīm, Al-Fihrist, Cairo 1348 H, p. 413.

二八 M. Meyerhof, Pharmacology during the golden age of Arabian medicine. (Ciba Symposia, Aug-Sept., 1944, pp. 1857, 1860.

二九 Meyerhof, op. cit. p. 1857.
Brockelmann, op. cit. p. 233.

三〇 Guigues, Essai p. XXV.

三一 陳邦賢「中国医学史」（一九五九年上海商務印書館刊、但し初版は一九三七年三月刊）頁一五八（中国受大秦医薬的影響の項）

三二 Ibn el-Beïthar, Traité des simples, traduit et commenté par L. Leclerc, Paris 1877, Tome II, pp. 73—74.

三三 Ibid, Tome III, p. 90.

三四 アラビア語名は farāsiūn 灌木の一種。ギリシア名は prāsioi 廃墟などに生ずるという。

三五 Astūkhūdūs 魂を捕えるものという意味、葉はすこぶる苦く、煎じて服用すれば胸の病に効があり、また脳を清めるともいう。また解毒の力があり、毒蛇に咬まれたときに特効を発する。Ibn el-Beithār, tome 1, pp. 59—60.

三六 アラビア語名は。qust アラビア産を最上とし、白く、軽く、芳香がある。次はインド産で、厚くて黒い。その次はシリア産で、重く、つげ色で強い臭いがある。香木の一種。Ibn el-Beithār, Tome 3, pp. 85—86.

三七 Ibn el-Beithār, Tome 3, p. 195.

三八 Ibid. Tome 3, pp. 194—95.

三九 Ibid. Tome 3, p. 232.

四〇 Ibid. Tome 2, p. 423.

四一 Ibid. Tome 3, p. 63.

四二 Ibid. Tome 3, pp. 111, 112.
四三 Ibid. Tome 2, pp. 203, 204.
四四 Ibid. Tome 3, pp. 126, 127. Tome 2, pp. 423, 424.
四五 Ibid. Tome 1, p. 98.
四六 Ibid. Tome 1, pp. 31, 32.
四七 Ibid Tome 1, pp. 347, 348.
四八 P. Guigues, Le livre de l'art du traitement… Essai.